

**【報告】**

**第6回「卒業生の保健師の集い」をふりかえって**

仲村 秀子 鈴木 知代 中丸 弘子 富安 眞理  
鈴木みちえ 片山 京子 中野 照代

聖隷クリストファー大学看護学部

**Looking back to the 6th meeting of  
“Community health nursing graduates”**

Hideko NAKAMURA, Tomoyo SUZUKI, Hiroko NAKAMARU,  
Mari TOMIYASU, Michie SUZUKI, Kyoko KATAYAMA, Teruyo NAKANO

Department of Nursing, Seirei Christopher University

**抄 録**

第6回「卒業生の保健師の集い」の概要と振り返りを報告する。今回の「集い」でも、これまでと同様に卒後教育の側面を持つこと、参加者がエンパワメントされることが確認された。また、講演を県や市町村保健師にも公開し参加を得た事から、「集い」が地域への貢献の可能性をもつことが考えられた。

キーワード：「集い」、卒業生、看護倫理、大学院進学

## I. はじめに

第6回「卒業生の保健師の集い」(以下、「集い」)が、2006年3月11日(土)に、本学で開催された。その概要と振り返りを報告する。

## II. 「集い」の概要

午前は講演会、午後は卒業生によるプレゼンテーションという2部構成で行った。

### 1. 講演会の概要 (10:00~11:30)

本学看護学部の小島操子教授により「看護実践における倫理—保健師の活動と倫理的問題—」というテーマで行なわれた。内容は、まず看護教育と倫理を歴史的に概観し、次に倫理的判断のよりどころとして基本原則・ICN (International Council of Nurses) 看護師の倫理綱領・日本看護協会による看護者の倫理綱領・患者の権利に関するリスボン宣言等が解説された。そして、保健師が実践活動で捉える主な倫理的課題について、参加者への事前アンケートを基に語られた。最後に、倫理的問題への対応策も示された。特に、倫理上の基本原則については、6原則をひとつひとつ丁寧に解説され、看護のどのような対象・場であっても、この原則に立ち返る事が、倫理的問題を判断していく上でのよりどころとして役に立つ事を示された。また、講演全体に教授自身の体験が豊富に盛り込まれ、分かり易く、感銘深いものであった。

参加者は、卒業生10名、一般参加(行政保健師など)5名、在学生ボランティア6名、教員6名の計27名であった。

### 2. 卒業生によるプレゼンテーションの概要

(1:30~15:30)

「私のステップ・アップ—大学院進学—」をテーマに3人の卒業生が体験を語り、その後は参加者との自由な交流を行い、進学資金調達法や職場にどのように理解を得たかなど多岐にわたって意見・情報交換が行われた。参加者は、卒業生6名、在学生ボランティア6名、教員6名の計18名であった。3人の卒業生のうち本稿に掲載する承諾が得られた2人のプレゼンテーション内容は、以下の通りである。(①進学した大学院名、②進学動機、③大学院選択方法、④大学院で学んだ事、⑤研究テーマ、⑥現在の仕事にどう生かされているか、の順に記す)

#### 1) 2001年卒業生 神庭純子(当時、市保健師)

- ① 本学大学院看護学研究科
- ② 教育学部で家政教育を修めたが、あらゆる健康レベルを視野に入れて「生活するとはどういうことか」について深く考えたいと、本学看護学部に入學したが、更に自分の関心事をより深めた学修をしたいと考えて大学院進学を決めた。
- ③ 本学の地域看護学分野では家族看護学の学修に特色をおいている事を知り、自分のバックグラウンドが家政教育であったことから、本学に決めた。また、臨床経験を経てから大学院進学をすすめる風潮がある中で、個人の背景や関心事を理解し認めていただけた事も大きく影響した。
- ④ 学ぶとはどういうことか、自分自身の探求したい思いをどのように明確にし形にしていくか、研究する姿勢や看護者として物事をみとる姿勢を学んだ。年齢や経験が多様な同級生との学びあいや語らいの意味の重さは修了して後に実感している。また、

恩師との出会い・人格的なふれあいが自分自身を成長させてくれた。

- ⑤ 「養育期の家族における育児不安とその要因に関する研究」をテーマに、特に家族機能との関連性について量的研究を行った。さらに、質的な分析により、育児に関わる思いの特徴について研究を深めた。
- ⑥ 在学中に講習会に通い、「家族相談士」を取得したことは、保健師として相談者に向かい合う時の基本姿勢を培うこととなった。研究過程で統計学に関する学びを深めたことで、著書（本田克也、浅野昌充、神庭純子著「統計学という名の魔法の杖―看護のための弁証法的統計学入門」、現代社、2003年）の執筆に関わる事となった。保健師として対象をみてとる指針を持って実践し、活動評価に必要な思考と方法を身につけることができた。それが、自信ややりがいにもつながった。

## 2) 1998年卒業生 片川久美子（特別区保健師）

- ① 山形大学大学院医学系研究科
- ② 事業をやるごとに、データはたまっていくのに、データのまとめ方も分からないままに就職後2年が過ぎ、これではいけないと思ひ、事業評価を学びたいという気持ちで進学を決意した。
- ③ インターネットを用いて、大学でどのような研究を行っているのかを検索した。地域看護では、在宅ケアを中心に研究しているところと行政における看護を中心にしているところがあることが分かった。行政における看護を研究している大学の教授に連絡を取り、面接を受け決定した。
- ④ 理論に基づいた看護研究の方法が学べ、また様々な人とのネットワークが広がった。

看護教育についても関心をもつようになった。

- ⑤ テーマは、「乳幼児健診に対する母親の満足感に関連する要因の検討」で、満足感を測定する質問項目の作成と、Donabedianによる質の評価と、サービス・マネジメント論の枠組みに基づいて健診に対する満足度を測定し、関連する要因を検討した。
- ⑥ 科学的根拠に基づいた保健事業を企画、立案する事を念頭において仕事をするようになった。他職種の人や他領域の人との連携が図りやすくなった。

## III. 振り返り

### 1. 講演会について

「集い」では、その時々の特ピックスを講演会のテーマにしてきている。今回は、「看護倫理」を取り上げた。講演会参加希望者に対して、事前アンケートを実施し、直面している倫理的問題について尋ねたが、「倫理的問題のイメージがわからず、よくわからない」と記載している者もいた。保健師として活動していく中で、おそらく多くの保健師は、プライバシー保護と情報の共有の狭間で判断に迷ったり、本人や家族と保健師の考え方のずれで困難を感じたり、法や所属組織との間に葛藤を感じるなどしてきたであろうが、それを倫理的問題として捉えてはこなかったように思われる。このことは講演会で小島教授が語られたように、看護教育の中で倫理が明確に位置づけられて教育されてこなかった背景が影響しているのであろう。

また、保健師の倫理的問題に関する調査研究は非常に少ない。宮崎ら（2003）は、保健師が捉える倫理的課題として6つの内容に分類し、倫理的指針の必要性を指摘している。また、加

藤ら (2004) は、保健師の遭遇する倫理的ジレンマとして、保健師と本人あるいは家族の意向が異なる状況について、保健師が問題を判断する際に基盤となった考え方と本人あるいは家族の考え方の違いに着目した分析を報告している。中村ら (2004) は、倫理的問題への直面は、倫理的問題への悩みの直接の要因にならないことを示唆している。

2003年に、個人情報保護に関する法律や行政機関の保有する個人情報保護に関する法律等が公布された。また人々の権利意識の高まり等から今後、保健師は実践場面で倫理的ジレンマにより多く直面する事が予想され、今後取り組んでいく必要性の高い研究分野であろう。このような状況の中で、どのような対象や場であっても活用できる倫理的判断のよりどころを学べた意義は大きい。これまでも「集い」が卒業教育の側面をもつ事は報告されてきたが (仲村, 2004)、今回も同様であった。

また、卒業生を対象としている「集い」であるが、前回の午前の講演は、長年にわたり保健師教育・研究を続けてこられた藤生君江教授の記念講演であったことから、初めて県や市町村保健師にも参加を呼びかけた。今回も、倫理的問題をめぐる前述した状況から、県や市町村保健師にも公開し、5名の参加を得た。このことは、「集い」が地域に貢献できる可能性もあるといえるだろう。

## 2. 卒業生によるプレゼンテーションについて

今回のテーマ設定に当たっては、前回は、「保健師の活動を文字にしよう」というテーマで分科会をもったので、更なるステップ・アップを狙った。また日頃、学会等で卒業生と再会したり、大学院に進学したという消息を聞く事が度重なった。これらの事から、大学院進学を

テーマにした。

平井ら (2004) の愛知県内の行政保健師を対象とした調査では、大学院進学希望者の割合は32.3%と報告され、山田ら (2005) の宮城県内で行なわれた同様の調査では21.0%と報告されている。前者の調査では、大学院進学に関連する要因として年齢 (30歳代が多い)、大学院の存在を知っている事を挙げている。今回も含めて、これまで「集い」の参加者は卒業後あまり年数の経っていない者が多かった。今回参加した卒業生の数がこれまでと比較して少なかったのは、テーマ設定によるところが大きかったかもしれない。

また、卒業生は、自分が執筆を担当した著書、原著論文や調査報告書の別刷りを参加者や教員に配布した。教員として嬉しくも、頼もしくもあり、また励みにもなった。

## 3. 全体を通して

前回の「集い」の報告 (鈴木, 2006) では、「集い」が卒業生保健師、在学生ボランティア、地域看護教員の3者がそれぞれの役割を持ち、共同作業する中でエンパワメントを目標にした場として位置づいてきたことが報告されている。今回も、集いの場での参加者や在学生ボランティアの発言や反応から、セルフ・エンパワメントやピア・エンパワメントが引き出された事が見てとれた。また「集い」終了後年内 (2006年) に、参加した卒業生の中から1名が実際に大学院進学が決まり、在学生ボランティアから2名が保健師として就職することになった事を報告する。

地域看護教員の役割は、企画・運営・評価であるが、6回目となった今回は企画の段階で、企画者を中心として資料係、会場係、接待係などを決め役割分担して行ったことから、これま

でよりも地域看護領域全体で取り組んだものとなったことも報告しておかなくてはならない。

## 引用文献

平井さよ子,海老真由美,山田聡子他(2005)看護職の大学院への進学ニーズに関する調査,愛知県立看護大学紀要,8,33-40.

加藤典子,宮崎紀枝,麻原きよみ他(2004)保健師の遭遇する倫理的ジレンマ—保健師と対象者本人あるいは家族の意向が異なる状況に関する分析—,日本看護科学学会学術集会講演集,24,239.

宮崎紀枝,大森純子,麻原きよみ他(2003)地域看護職の日常実践活動で捉える倫理的課題—

保健師に対する調査から—,日本看護科学学会学術集会講演集,23,191.

仲村秀子,鈴木知代,中野照代他(2004)第3回「卒業生の保健師の集い」を振り返って,聖隷クリストファー大学看護学部紀要,12,187-195.

中村仁志,藤村孝枝,森田秀子他(2004)倫理に対する保健師の認識,日本看護研究学会雑誌,27(3),156.

鈴木知代,山内愛美,小川雅子他(2006)第5回「卒業生の保健師の集い」をふりかえって,聖隷クリストファー大学看護学部紀要,14,95-105.

山田紀代美,真覚健,塩野悦子他(2005)宮城県における看護職の大学院進学ニーズ調査報告—行政保健師への調査—,宮城大学看護学部紀要,8(1),97-102.